

はじめに

多摩森林科学園のサクラ保存林には、伝統的な栽培品種および各地の名木などのクローンが約 600ライン収集され、総数約1300本のサクラが植栽されています。このパンフレットでは、それらのうち主要な八重の桜に焦点をあてて紹介しています。

八重桜は一般に染井吉野よりも開花が遅く、多摩森林科学園で4月下旬までの長い期間サクラを楽しむことができるのは、八重桜が比較的多く植栽されていることにもよります。地図を片手に、多様な美しい八重桜をお楽しみください。

多摩森林科学園長
吉丸 博志



‘はるか’

多摩森林科学園のサクラ保存林にある‘思川’の実生を1999年に発芽させ選抜した栽培品種。2004年に八重咲きの花が確認された。花粉親はサトザクラでマメザクラ・ヤマザクラ・エドヒガン・オオシマザクラ4種の関与が推定されている。花弁は基部が白色に近い淡紅色で14~19枚の八重咲き。萼筒や葉柄の開出毛が特徴。開花期は‘染井吉野’より遅く、4月中旬頃。

森林総合研究所から2012年12月に種苗法に基づく農林水産省の品種登録の出願をおこなった。

独立行政法人 森林総合研究所 多摩森林科学園

〒193-0843 東京都八王子市甘里町1833-81
電話:042-661-0200

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/tmk/>
e-mail: kouhotama@ffpri.affrc.go.jp

製作:多摩森林科学園 岩本宏二郎
勝木 俊雄

発行:2013年3月14日

桜めぐりマップ

サクラ保存林で見る

八重桜



独立行政法人 森林総合研究所
多摩森林科学園

八重桜

野生のサクラの花の花弁数はふつうすべて5枚で、一重です。これに対して花弁数が10枚を超えるような花を八重、6-10枚の花を半八重といいます。八重咲きのサクラはごく稀に野生でも見つかりますので、突然変異で生じると考えられています。平安時代にも八重桜の記録があり、こうした変わった花をもつサクラは古くから珍重されてきました。八重咲きの性質は遺伝しますが、子供も必ず八重咲きになるとは限りません。そこで、八重の花をもつサクラを増やそうとすると、接ぎ木や株分けなどでクローン増殖する必要があります。こうしてクローン増殖されたものが栽培品種として扱われることになります。また子供の中には親よりもさらに花弁数が多い花をもつものも生まれます。これを選抜して増殖すると新しい栽培品種となります。現在栽培されている‘普賢象’や‘関山’などの八重桜の多くは、江戸時代にこうして生まれたものだと考えられています。

荒川堤の桜

江戸時代に生まれた八重咲きのサクラの栽培品種は、江戸では大名屋敷の庭園を中心に育てられていました。そのため、明治時代になると手入れが行き届かなくなり、消えた種類もありました。そこで江北村（現在の東京都足立区）の村長であった清水謙吾はこうしたサクラを集めて保存することを計画しました。苗木を駒込の植木屋の高木孫右衛門などに依頼し、78種類8,000本の桜が1886年に荒川堤に植栽されました。このような場所は他になく、五色の桜と呼ばれ、大正から昭和初期には桜の名所となりました。学術的にも貴重で、研究材料として多く利用されました。現在に伝わる栽培品種の多くは荒川堤から広まったと考えられます。荒川堤にあったサクラは八重咲きだけではなく、一重咲きの栽培品種も含まれますが、八重桜について語るうえでは欠かせません。そこで、このパンフレットでは一重咲きのサクラも含めて荒川堤にあったと考えられる桜を紹介しています。

サクラ保存林の八重桜

サクラ保存林には全国から集められた名木や栽培品種など様々なサクラが保存されています。その中でもっとも重要なグループが安行（現在の埼玉県川口市）から導入された栽培品種です。学術的にも貴重であった荒川堤のサクラのコレクションは、残念ながら昭和時代に一度すべて消失しました。しかし、安行の植木屋であった小清水亀之介などの尽力により荒川堤のコレクションが安行で栽培されてきました。サクラ保存林は小清水が保存した荒川堤に由来するサクラを保存しているのです。2012年現在、サクラ保存林には31栽培ライン、98本の安行に由来するサクラが保存されています。

主な用語

萼片(がくへん)：花を構成する器官のなかで花弁の外側につく花葉を萼片という サクラの場合、萼片は萼筒と萼裂片に区分され、解説部で用いている萼片は正確には萼裂片となる

萼筒(がくとう)：萼片が融合して筒になっている部分

花弁(かべん)：花を構成する器官のひとつ 花びら

サクラの場合、通常は5枚が放射状につく

旗弁(きべん)：基部は糸状に細長くのび先端部は旗状の花弁 サクラの場合、花弁と雄しべの中間的なもの

鋸歯(きょし)：葉や萼裂片の縁にある切れ込み

サトザクラ：人為的に栽培されているサクラの栽培品種グループ オオシマザクラが母体となっているが、野生のオオシマザクラの変異より多様で、ヤマザクラやオオヤマザクラなどの種間雑種となっている場合が多い

全縁(ぜんえん)：葉などの縁に切れ込みがないこと

葉化雌しべ(ようかめしべ)：雌しべが異常に発達し、葉状になったもの 八重咲きのサクラにはしばしば見られる



八重桜解説

①栽培ライン名: 原則的に導入元と導入時の名称を栽培ライン名としています。ただし、明らかに間違った名称で導入された場合や、原木の現地名と大きく異なっている場合などは変更した名称を用いています。②種名: 各栽培ラインの種名を示しています。変種は区別していません。雑種は識別が可能な種について示しています。③栽培品種名: 栽培品種名がある場合に示しています。栽培品種名はない場合もあります。④導入元: 導入元の組織名・地名・人名等と市町村を示しています。⑤解説: 各ラインに対する簡単な解説をしています。⑥開花期: 開花期の目安を早春・盛春・晩春の3段階と秋咲きについて示しています。

栽培ラインの解説と写真は、案内図の標識杭番号順に並べています。

①安行の松月 ②オオシマザクラ ③'松月' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった松月が伝わったと考えられる '松月'の花は淡紅色で八重咲き 花弁の先に細かな切れ込みが多く萼片に鋸歯があることが特徴 若芽の色は緑色 京都の瞿麥桜も同じ栽培品種 ⑥晩春

①安行の楊貴妃 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ×カスミザクラ ③'楊貴妃' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった楊貴妃が伝わったと考えられる '楊貴妃'の花は淡紅色で八重咲き '江戸'によく似て混同される場合も多いが、萼片はより細い披針形で正常な雌しべが多い ⑥晩春

①安行の普賢象 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'普賢象' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった普賢象が伝わったと考えられる 古くは白普賢と称され、紅普賢('関山')と対比されていたと思われる 花は淡紅色で八重咲き 雌しべが葉化することと萼片に鋸歯があることが特徴 ⑥晩春

①御祇(みそぎ) ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'御衣黄' ④遺伝学研究所 静岡県三島市 ⑤遺伝研より御祇として導入 遺伝研には現存しておらず、以前の導入履歴は不明 '御衣黄'の花は緑色で八重咲き 花弁に明らかな濃緑色部がある点で'鬱金'と区別されるが、中間的なものもある ⑥晩春

①安行の福祿寿 ②オオシマザクラ ③'福祿寿' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった福祿寿が伝わったと考えられる '福祿寿'の花は淡紅色で八重咲き 花弁は質厚でねじれるように曲がる 萼片は長卵状三角形で全縁 八重咲きとして栽培されている '福祿寿'もある ⑥晩春

①安行の大提灯 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'有明' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった大提灯が伝わったと考えられる 荒川堤の大提灯と千里香、有明は区別せずにすべて栽培品種としては'有明'にまとめるべきと考えられる 花は微淡紅色で半八重咲き ⑥晩春

①安行の白雪 ②マメザクラ×ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'白雪' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった白雪が伝わったと考えられる 花は白色で一重咲き 花弁が円形でしわがない点と小花柄に開出毛がある点が特徴 荒川堤で三好学が発見・命名したが以前から別名称で栽培されていたと思われる ⑥晩春

①安行の鬱金 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'鬱金' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった鬱金が伝わったと考えられる 花は淡黄色で八重咲き 荒川堤では当初、浅黄の名称が記録にあるが途中で鬱金に替わっている 鬱金と浅黄は異なるという意見もあるが、異名扱いとすべきと考えられる ⑥晩春

①安行の白妙 ②オオシマザクラ ③'白妙' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった白妙が伝わったと考えられる 花は白色で八重咲き 緑色の若芽と鋸歯がある萼片が特徴 荒川堤にはよく似た雨宿があり、同一栽培品種と思われるが、サクラ保存林には荒川堤由来の雨宿がなく、検証できない ⑥晩春

①安行の江戸 ②オオシマザクラ×カスミザクラ ③'江戸' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった江戸が伝わったと考えられる 花は淡紅色で八重咲き '楊貴妃'によく似て混同されるが、異なるクローン 荒川堤にあった東錦や糸括、八重紅虎の尾はすべて栽培品種としては'江戸'にまとめられると考えられる ⑥晩春

①嵐山 ②オオシマザクラ ③'嵐山' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった嵐山が伝わったと考えられる 花は淡紅色で一重咲きだが、花弁数は6-7枚になることもある 一重咲きのサトザクラの中で花弁が円形で大きいことと萼片に明瞭な鋸歯があることで区別される ⑥晩春

①鷲の尾 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'鷲の尾' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった鷲の尾が伝わったと考えられる 花は白色で一重咲き 旗弁が生じることもある 花弁は円形で長さ2cmほどでしわ状のうねりがある '太白'に似ているが花弁はより小さい ⑥晩春

①安行の上旬 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'上旬' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった上旬が伝わったと考えられる 花は白色で八重咲き 花に強い芳香がある 同じ芳香がある '駿河台句'などと混同されることもあるが、花弁の数と若芽が緑色である点で区別される ⑥晩春

①佐野の紫桜 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ×オオシマザクラ ③'紫桜' ④佐野園 京都府京都市 ⑤佐野園から紫桜として導入 以前の導入履歴は不明 花は紅紫色で一重咲き 荒川堤にはよく似た金剛山があり、同一栽培品種と思われるが、サクラ保存林には荒川堤由来の紫桜と金剛山がなく、検証できない ⑥晩春

①京都の桐ヶ谷 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'御車返' ④京都植物園 京都府京都市 ⑤佐野園が仁和寺から桐ヶ谷として導入したものに由来すると思われるが詳細は不明 花は淡紅紫色で半八重咲き 鎌倉の桐ヶ谷にあつたという話から桐ヶ谷とも呼ばれる栽培品種としては'御車返' ⑥晩春

①八柱の紅普賢 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'関山' ④八柱霊園 千葉県松戸市 ⑤紅普賢として導入されたが栽培品種としては'関山' 花は濃紅紫色で八重咲き 開花時の若芽も濃紅紫色普賢象は室町時代から知られる名称で江戸時代には様々なサクラにつけられていた ⑥晩春

①神代の駿河台句 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'駿河台句' ④神代植物園 東京都調布市 ⑤神代植物園以前の履歴は不明 花は白色で半八重咲き 花に強い芳香がある 荒川堤にあった御座の間句や滝句とよく似ているが未検証 神代周辺は東京都の苗木生産の中心地であった ⑥晩春

①神代の芝山 ②マメザクラ×エドヒガン×オオシマザクラ ③'芝山' ④神代植物園 東京都調布市 ⑤神代以前の履歴は不明 芝山として導入されたが、荒川堤の薄墨と同一と考えられる 芝山との関係は検討が必要 花は白色で一重咲き 小花柄の開出毛と花弁のしわ状のうねりが特徴 ⑥晩春

①安行の一葉 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'一葉' ④安行見本園 埼玉県川口市 ⑤荒川堤にあった一葉が伝わったと考えられる 花は淡紅色で八重咲き 和名は1本の雌しべが葉化していること由来するが、2本の場合もある 京都で栽培されている瞿麥桜は'一葉' ⑥晩春

①白山高砂 ②チョウジザクラ×ヤマザクラ×オオシマザクラ×カスミザクラ ③'高砂' ④京都植物園 京都府京都市 ⑤京都植物園以前の履歴は不明 花は淡紅色で八重咲き 萼筒や葉面に密毛があることが特徴 荒川堤にあった南殿も'高砂'にまとめられる ⑥晩春

①神代の天の川 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'天の川' ④神代植物園 東京都調布市 ⑤神代以前の履歴は不明 花は淡紅色で八重咲き 枝が横に広がらずに上向きに伸びることが特徴 サクラの花は下向きに咲くものが多いが、'天の川'は花も上向きに咲く ⑥晩春

①七沢の狸々 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'麒麟' ④神奈川県林業試験場 神奈川県厚木市 ⑤試験場以前の履歴は不明 狸々として導入されたが明らかな間違い 花は濃紅紫色で八重咲き '関山'に似ているが萼片に明瞭な鋸歯がある ⑥晩春

①白子不断桜 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'不断桜' ④子安観音寺 三重県鈴鹿市立寺家町 ⑤不断桜は江戸時代から有名な名木で白子の子安観音寺に原木がある 荒川堤でも白子に由来するものがあつたと思われる 花は白色で一重咲きで特徴はないが、秋から春まで咲き続ける ⑥早春・秋

①佐野の朱雀 ②ヤマザクラ×オオシマザクラ ③'朱雀' ④佐野園 京都府京都市 ⑤佐野園が興津試験場経由で荒川堤由来のものを入手したと思われる 花は淡紅色で八重咲き 長さ約9mmのややくびれた細長い萼筒が特徴 雪月花として栽培されている '朱雀'もある ⑥晩春

多摩森林科学園サクラ保存林 八重桜 植栽箇所案内図



・図中の数字は、歩道沿いに設置された標識杭の番号を示しています。
 ・本地図の地形データは国際航業株式会社から提供を受けたものを利用しています

